思い出の夏の匂い PART Ⅲ

ある匂いを嗅ぐと夏を思い出す。そんな夏への扉の鍵のような匂いについて、通信員の仲間に書いてもらった「思い出の夏の匂い」第3弾をお届けします。

亡き妻思い出させる
初夏の風運ぶ洗濯物の香り

堀井さん

【荒川・塗装・堀井龍二通信員】僕の思い出の夏の匂いは、洗濯物の匂いです。けしてパンツ泥棒ではありませんが、夏は特に洗剤の香料の匂いが強くなり、昔を思い出してしまいます。

今は、たまにどこからか匂ってくるか、妹が母の服や僕の下着を干している時に匂ってくるくらいです。亡くなった僕の嫁さんは洗濯が好きでした。また、ふとんを干している時にも夏の香りを感じます。最近、洗濯物の匂いがすると切ない気持ちになることがあります。

僕は家事は苦手ですが、洗濯は全自動なので楽です。今の洗剤は香料が強く、僕は油足なので助かっていますが、僕の思い出の洗濯物の匂いのような奥ゆかしさがありません。やはり初夏の風に送られてくる匂いが一番好きで、その度に嫁さんのことや昔のことを思い出してしまいます。

海水に冷しトマト
山桃の汁で服にはシミ

安立さん

【小平東村山・塗装・安立孝章通信員】思い出の夏の匂いというと、ヤマモモとトマト。山村育ちの私にとって、お菓子に代わる果物が春・夏・秋と自然の野山に豊富だった。山に生息する果物は自由に食べることができ、文句を言われることもなかった。

ヤマモモは赤い色の丸い玉っころで、味は甘いが食べ過ぎるとすっぱくなってくる。少年時代の夏服は木綿ばかりで、ヤマモモの汁が服につくと洗っても落ちない。着古したものならまだしも新品もお構いなしに汚してしまうものだから母に叱られたものだ。

今では一年中食べられるトマトも、昭和30年代はじめの頃は、野菜であり果物でもありました。その頃のトマトの美味さは忘れられません。（当時のトマトの品種は今では栽培できないそうです）

海水浴に行き、海水に冷やして食べた美味さは夏一番の思い出です。

茅葺きの下で乾杯
アテは夕立後の水蒸気

岩武さん

【多摩・稲城・設計・岩武憲生通信員】約20年ほど前、茅葺き屋根の田舎の実家に夏は帰省していました。

実家は誰も住んでいないので、夏になると背丈まで伸びた草木の炎天下での掃除です。夕方になると毎日、夕立になり、いいお湿りになります。

夕立が来ると今日のお仕事はおしまい。さっそく草取りの手を止めて、縁側に座り、茅の屋根づたいに垂れる雨水を見ながらビールで乾杯です。田舎にいると、「今日は何曜日?」という生活です。

近くの山から雨上がりの白い水蒸気が上がり、ヒグラシの「カナカナ」という声を聞いていると、今日の草取りしたところから白い水蒸気と土の匂いが漂ってきます。

ビールも進み、周りは真っ暗になり、遠くに見える民家1軒のみです。都会では味わえない光景です。

次の日もこのような生活をして、実家の草取りを終えて帰京しました。

プールの消毒剤
茹でトウモロコシも

【杉並・リフォーム高橋博人通信員】学生の頃、夏休みになると毎日学校のプールに通っていました。そのプールには毎日消毒剤が撒かれていたので、匂いは強烈でした。プールに入る前はその匂いを嗅ぐので、今でも夏の匂いの一つとして残っています。

昼食時、家に帰るとよくそうめんやトウモロコシを茹でてくれていました。この匂いも思い出の一つです。家族で食べた食卓の情景が、匂いを嗅ぐだけで思い出されます。

午後からは野球部の部活。練習後、汗びっしょりになったユニホームの匂いもまた強烈なので、頭に残っています。

夕方になると雷を伴った夕立の雨が、地面に叩きつけられます。雨が上がると、独特な匂いを醸し出すので、心に残っています。最後に夜は、夕食後のスイカです。甘い香りの匂いは、夏の間に一息つかせる優しい思い出でした。

高橋さん

他にもいろいろありますが、家族で旅行にいった那須の高原で風にそよぐ草原の匂いは、今までの夏の匂いの中では、一番の思い出の匂いとなっています。

天城の山中でガス欠
不安を消し去った草いきれ

野本さん

【豊島・主婦・野本陽子通信員】今から50年前の思い出です。何年かぶりで、友人たち6人で西伊豆の海へ行った時のこと。友人のボーイフレンドの運転する車で天城山を走っている時、急に車が動かなくなってしまいました。

ガス欠でした。聞けば車は借り物で、メーターが故障していることを知らなかったらしいのです。

天城の山の中は、昼間でも薄暗く、ガソリンスタンドは何キロ先にあるか分かりません。男子3人はガソリンを求めて山を下りて行きました。

車とともに取り残された女子3人は、不安と腹立たしさでいっぱいになり車外に出ました。

その時、道の両脇の草むらから香る草いきれがとても新鮮で、草がこんな香りがすることを初めて知りました。

1時間過ぎた頃、男子がガソリンを買って帰ってきた時は、いつの間にか不安も腹立たしさも消えて、草いきれが私達を包んでいました。

懐しい蚊取り線香
母が部屋毎に置き回る

本山さん

【台東・主婦・本山美知子通信員】私の育った埼玉の田舎町には、今思い返すと四季折々に匂いが漂っていた。新緑や土の匂い、花々の香り。それが日常の生活空間の中にあったが、子どもの頃は、それを全く意識したことがなかった。特に今でも、懐かしく、また母を強く思い出させるのは、お化粧ではなく、洗剤でもない、蚊取り線香の匂いです。夕方になるとマッチで火をつけて、庭に近い廊下や部屋に一つずつ置いて回る。家中が煙で充満した。何とも感じなかった。それより蚊に刺されるのが嫌だったのかもしれない。

どこまでも続く青い空に入道雲が出て夕立になる。決まって蚊帳を吊る。姉たちと寝転がっておしゃべりをした。

懐かしい夏の匂いがよみがえってくる。

親戚の小遣い目当て
土手に集まり花火見物

宮澤さん

【村山大和・造作大工・宮澤良明通信員】皆さんは、蚊帳というものを知っていますか。夏になると、蚊を防ぐ道具として、天井から吊り下げる防虫ネットのようなものです。子どもの頃は、この蚊帳が主流で、どこの家庭にもあったものです。それがいつの間にか蚊取り線香なるものが登場し、主流となりました。

子どもの頃の夏の楽しみといえば、花火大会。親戚の人たちが集まり、河原の土手で観覧しました。その時、役に立つのが蚊取り線香。土手に集まる人たちは、必ずといっていいほど、持参してきます。

なぜ花火大会かというと、集まった親戚の人たちからもらえるお小遣いが目当て。お正月、夏の花火大会は、私にとっての収入源だったからです。

今でも、親戚の人たちと話すと、当時の話題が上がります。香取り線香の匂いを嗅ぐと、夏が来たことを感じ、当時のことを思い出します。

中央高速で感じる
山梨の風のワクワク感

川口さん

【小平東村山・大工・川口直明通信員】少年時代はお盆の頃に父の実家の山梨に帰省するのが一番の楽しみで、親戚が一同に集まり、賑やかな時を過ごすのが大好きだった。

そのワクワク感を胸に、中央高速で八王子を過ぎた、県境のあたりから流れる風の匂いが思い出だ。当時車のエアコンの効きが悪く、窓を開け走っていると、山の匂い交じりのモワモワした空気、風の匂いが心地良かった。また、サービスエリアの人混みの匂いも、夏休みの感じが出ていて、今振り返ると良かった。

田舎に滞在中は、父の母校である木造建ての小学校があり、廃校になってはいたが、お盆はプールを解放していた。そのプールに入るのも楽しみで、プールの塩素の匂いでもまた夏を思い出す。子どもの頃の思い出が、山梨にたくさん詰まっている。